

書評・紹介

鈴木善次『日本の優生学——その思想と運動の軌跡』

三共出版, 1983年11月, 211ページ

本書は日本における優生学 (Eugenics) の歴史を扱ったものである。著者の鈴木善次氏は植物学科と農学科を卒業し、農作物の品種改良に携わったことのある研究者で、現在は科学史を専門にしておられる方である。本書は同氏が1965年から1979年にかけて『科学史研究』、『生物学史研究』、『医学史研究』などに発表した論文を中心にまとめたものである。本書を出版するまでに、著者が長年月を費いやしただけあり、実に徹底した文献調査を行っている。また、既に故人になられた人達を含めた関係者らに手紙で疑問点など問い合わせも行っている。これまでに、日本語で書かれた優生学に関する成書は数冊あるが、日本の優生学の歴史を扱った単行書は本書が最初である。

本書は次の4章から構成されている。第1章は欧化思想の中の人種改良論、第2章は優生学の導入をめぐる議論、第3章は社会運動としての優生学、第4章は断種法制定をめぐる一民族衛生学と人類遺伝学である。このほか、優生学関係年表を最後に載せてある。著者は日本の優生学関係の活動を大きく3段階にわけて捉えている。第1の段階は明治初期から中期にかけての動き (第1章)、第2の段階は明治末期から大正初期にかけての時期 (第2章)、第3の段階は大正末期から昭和初期にかけての時期 (第3章) である。

第1章は生物学者らによるダーウィンの進化論の紹介と福沢諭吉らによる人種改良論の展開の時期を扱っている。

第2章は優生学 (人種や民族の優化策、劣化防止を研究する科学) なる学問を最初に提唱したイギリスのゴルトン (F. Galton) の優生学の定義や目的などに始まり、わが国における幅広い分野の人たちによる優生学の導入をめぐる論議について述べられている。イギリスやアメリカでは生物学者が中心になって優生学を論じているのに対し、わが国においては生物学者のほか幅広い人たちが優生学について論じているのが特徴的である。なお、ゴルトンは優生学研究のためにロンドン大学の中にゴルトン優生学研究室を作ったが、この研究室は現在でも同大学のゴルトン研究所人類遺伝学教室として存続している。また、この人類遺伝学教室の歴代の教授には著名な集団遺伝学の創始者 F. A. フィッシャー、J. B. S. ホールデンや人類遺伝学者である L. S. ペンローズらがいる。なお、同教室から出版されている *Annals of Eugenics* (1925年創刊) は1955年に *Annals of Human Genetics* と改題され現在も刊行されている。

第3章は優生学研究の体制づくりや優生思想の啓蒙普及活動が開始された時期を扱っている。大正末期の頃までは遺伝学者らも優生学に興味を示し、優生学を研究するために研究所を設立すべく案などを雑誌に載せているが、アメリカにおけると同様に、この頃から遺伝学者らは優生学に興味を失っていった。わが国では、そのかわりに民間人によって優生学が学問として確立していくより、社会運動としての面が先行し民族主義的色彩の濃い優生学運動が展開されていった様子が論じられている。

第4章では諸外国で制定された断種法が、わが国では「国民優生法」として成立したいきさつが述べてある。これは昭和23年に「優生保護法」として姿をかえている。また、優生学の基礎的学問として遺伝学は重要な役割を荷なっているため、優生学と人類遺伝学との関係についてふれ、ここでは、わが国における人類遺伝学の先駆的役割を果たした駒井卓、川上理一、古畑種基先生らの研究をとり上げている。最後に人類遺伝学研究の変遷についてふれている。

最後になったが、本書は写真を多くとり入れてあり、大変読み易くて興味のそそられる本である。人類遺伝学、民族衛生学、人口学などを専門にしている方々に一読をお勧めしたい。

(今泉洋子)